

問1 約1万年以上続いた縄文時代の生活スタイルと、そこで使われた道具の関係について、正しい説明はどれですか。（2024年 熊本県公

立入試 類似）

- 磨製石器や弓矢、土器などが使われ、自然環境に合わせた定住生活が行われた
- 青銅器や鉄器が普及したことで、大規模な戦争や移動生活が繰り返された
- 大型の石造建築が造られ、それらを装飾するために精巧な土器が発達した
- 文字が発明されたことで、法律や契約に基づいた高度な都市生活が営まれた

問2 佐賀県の東名遺跡（ひがしみょういせき）では、約8千年前の地層から植物の繊維で編まれた国内最古級の「編みかご」が発見されました。このような発見から推測される、当時の人々の生活習慣や信仰に関する記述として正しいものを次の中から選んでください。（2019年 佐賀公立入試 類似）

- 自然の恵みに頼った生活を送っており、魔よけや豊かな収穫を祈るために土偶（どぐう）が作られた。
- 有力な王が各地を支配しており、その権力を象徴するために巨大な前方後円墳が造られた。
- 大規模な灌漑設備を整えて稲作を行い、村同士の争いに備えて周囲に堀を巡らせた環濠集落で暮らした。
- 仏教の教えが広まり、国家の安泰を願って各地に国分寺や国分尼寺が建立された。

問3 山形県舟形町で出土し、高さが約45cmあり国宝にも指定されている「縄文の女神」について述べた文として、歴史的な事実に基づいた正しい説明を選びなさい。（2019年 山形県公立入試 類似）

- 縄文時代中期に作られた土偶であり、当時の人々の信仰や祈りの対象であった。
- 弥生時代の遺跡から発見された青銅器であり、大陸との交流を示す資料である。
- 古墳の周囲に並べられた埴輪の一種であり、武人や馬の形をしたものが多い。
- 飛鳥時代に大陸から伝わった仏教の影響を受けて作られた、初期の仏像である。

問4 青森県に位置し、大型掘立柱建物跡などの発見によって縄文時代の定住生活の実態を明らかにした、日本最大級の集落跡は何か。（2025年 北海道公立入試 類似）

- 三内丸山遺跡
- 吉野ヶ里遺跡
- 登呂遺跡
- 岩宿遺跡

問5 縄文時代から弥生時代にかけての住居の構造について、地面を掘りくぼめる方法が取られた主な理由として、当時の生活環境から考えられる説明として最も適切なものはどれか。（2017年 茨城県公立入試 類似）

- 床を地面より低くすることで、室内の温度を一定に保ちやすくするため
- 床を地面から高く離すことで、収穫した穀物の湿気を防ぐため
- 大規模な灌漑施設を作る際、土を掘り出す作業と同時に建築するため
- 仏教の影響を受け、寺院の建築様式にならって地面に直接柱を立てないようにするため

問6 石器時代の道具や生活の変化について述べた文として、縄文時代の特徴を正しく説明しているものはどれですか。（2018年 徳島公立入試 類似）

- 氷河期が終わり温暖な気候になる中で、石をみがいた磨製石器や土器が使われ始めた。
- マンモスなどの大型の獣を追うため、移動生活に適した打製石器のみを使い続けた。
- 青銅器や鉄器が大陸から伝わり、石器は次第に祭祀用の道具へと変化していった。
- 本格的な水田稲作が広まったことで、石包丁を用いた穂首刈りが一般的になった。

問7 縄文時代に見られる「土偶」と、後の古墳時代に見られる「埴輪」を比較した説明として、正しいものはどれですか。（2019年

山形公立入試 類似）

- 土偶は、豊かな収穫や安産などのまじないのために縄文時代に作られたが、埴輪は古墳の主の供養や魔除けとして古墳時代に作られた。
- 土偶は、弥生時代に稲作が伝わった際に祭祀用として広まったが、埴輪は縄文時代に集落の守り神として置かれた。
- 土偶は、古墳の内部に副葬品として納められたが、埴輪は住居跡から発見されることが多く、日常的な食器として使われた。
- 土偶は、大陸から伝わった金属器の影響を受けて作られたが、埴輪は日本独自の土器文化から発展した石製品である。

問8 青森県にある三内丸山遺跡をはじめ、日本各地の縄文時代の遺跡から見つかる「土偶」について、その製作背景や当時の生活の様子を説明したものとして最も適切なものはどれですか。（2023年 香川公立入試 類似）

- 縄文土器が作られ、狩猟や採集による定住生活が行われる中で、食物の豊作や多産を祈るために作られた。
- 本格的な稲作が広まり、収穫した米を保存するための高床倉庫や金属器が普及する中で、魔除けとして作られた。
- 王や豪族といった有力者が現れ、巨大な前方後円墳が築かれた際に、死者を弔うために作られた。
- 大陸から伝わった仏教の教えが広まり、寺院の本尊として拝むために精巧に作られた。

答え合わせ・解説

問1	答え 1 磨製石器や弓矢、土器などが使われ、自然環境に合わせた定住生活が行われた	縄文時代は、氷河期が終わり温暖になった環境に適応した時代です。すばしっこい動物を狩るための弓矢や、木の実を加工するための磨製石器、そして食料の加工・保存を可能にした土器など、新しい道具が登場したことで、一定の場所に留まって暮らす定住生活が可能になりました。
問2	答え 1 自然の恵みに頼った生活を送っており、魔よけや豊かな収穫を祈るために土偶（どぐう）が作られた。	東名遺跡で発見された編みかごは、縄文時代の人々が身近な植物を利用して食料の採集や運搬を行っていた高い技術を持っていたことを示しています。この時代の生活は自然環境に強く依存していたため、自然の力を畏れ、豊かな収穫や安産などを祈る呪術的な道具として土偶が盛んに作られました。古墳の造営や環濠集落、国分寺の建立は、より後の時代（古墳時代、弥生時代、奈良時代）の出来事です。
問3	答え 1 縄文時代中期に作られた土偶であり、当時の人々の信仰や祈りの対象であった。	「縄文の女神」は、山形県の西ノ前遺跡から出土した縄文時代を代表する土偶です。土偶は縄文時代特有の遺物であり、その造形からは当時の人々の高い技術力や、精神世界を知ることができます。弥生時代に広まった青銅器や、古墳時代の埴輪とは、製作された時代も文化的な背景も明確に区別されます。
問4	答え 1 三内丸山遺跡	青森県で発見された三内丸山遺跡は、縄文時代における最大級の集落跡であり、当時の人々が一定の場所に長期間とどまる「定住」を行っていたことを示す重要な遺跡である。佐賀県にある弥生時代の吉野ヶ里遺跡と混同されやすいが、時代背景と地域（青森）を区別して理解することが重要である。
問5	答え 1 床を地面より低くすることで、室内の温度を一定に保ちやすくするため	竪穴住居は地面を掘り下げることで、外気の影響を受けにくくし、冬の防寒対策としての機能を備えていました。住居の中央には「炉（ろ）」が作られ、暖房や調理に使われていました。選択肢にある「床を高くして湿気を防ぐ」構造は高床倉庫の特徴であり、穀物の保存を目的としたものです。
問6	答え 1 氷河期が終わり温暖な気候になる中で、石をみがいた磨製石器や土器が使われ始めた。	約1万年前に氷河期が終わり気候が温暖になると、日本の植林や動物の生態が変化し、人々は定住生活を営むようになりました。この時期に登場したのが、より精巧な磨製石器や、食料の調理・保存に欠かせない土器です。打製石器は旧石器時代から継続して使われましたが、磨製石器の普及は縄文時代の大きな技術的特徴です。
問7	答え 1 土偶は、豊かな収穫や安産などのまじないのために縄文時代に作られたが、埴輪は古墳の主の供養や魔除けとして古墳時代に作られた。	土偶と埴輪はどちらも人型の土製品ですが、時代と役割が大きく異なります。土偶は縄文時代の狩猟・採集社会において、生命の誕生や自然の恵みを祈る宗教的な道具として機能しました。一方、埴輪は古墳時代に現れ、王や有力者の墓である古墳を飾り、その聖域を守る役割や、葬送の儀礼のために立て並べられました。
問8	答え 1 縄文土器が作られ、狩猟や採集による定住生活が行われる中で、食物の豊作や多産を祈るために作られた。	青森県の三内丸山遺跡は、縄文時代の大規模な集落跡として知られており、当時の生活を裏付ける多くの土器や土偶が出土しています。縄文時代の人々は、弓矢を用いた狩猟や木の実などの採集、漁労によって生活を営んでいました。土偶はこのような自然環境に依存した生活の中で、自然の恵みを祈り、豊かな収穫を願う信仰（呪術）の対象として重要な役割を果たしていました。